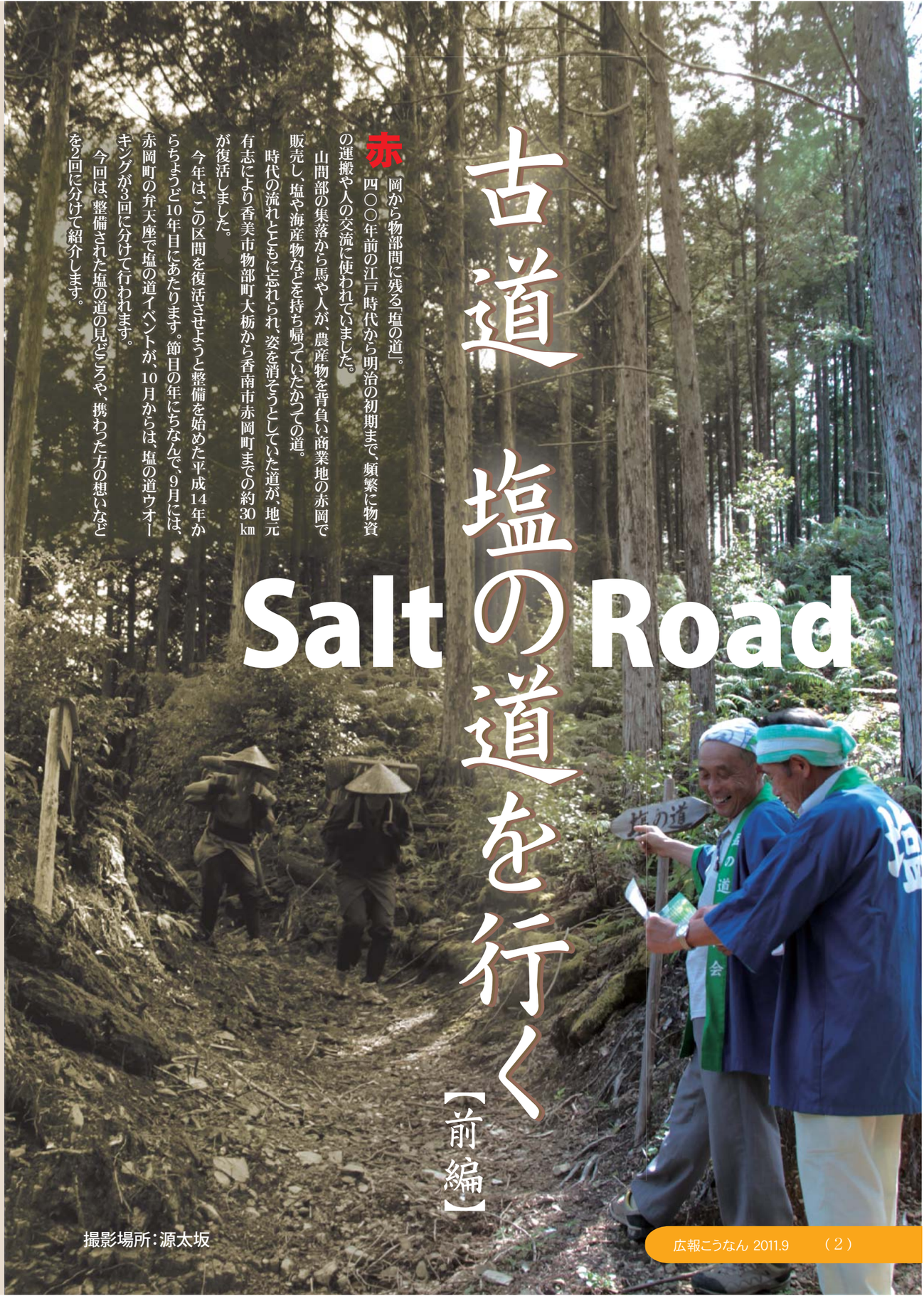
古道 塩の道を行く

Salt Road

【前編】



撮影場所：源太坂

赤岡から物部間に残る「塩の道」。四〇〇年前の江戸時代から明治の初期まで、頻繁に物資の運搬や人の交流に使われていました。

山間部の集落から馬や人が、農産物を背負い商業地の赤岡で販売し、塩や海産物などを持ち帰っていたかつての道。

時代の流れとともに忘れられ、姿を消そうとしていた道が、地元有志により香美市物部町大栃から香南市赤岡町までの約30㎞が復活しました。

今年は、この区間を復活させようと整備を始めた平成14年からちょうど10年目にあたります。節目の年にちなんで、9月には、赤岡町の弁天座で塩の道イベントが、10月からは、塩の道ウオーキングが3回に分けて行われます。

今回は、整備された塩の道の見どころや、携わった方の想いなどを2回に分けて紹介します。

想い

塩の道復活に想いを掛けた10年

土佐塩の道保存会
会長 **公文 寛伸**

平成14年に、昭和南海地震で倒れて草の中で眠っていた丁石を小松滋さんから「起こしてほしい」と頼まれて、住民有志8人で立て直したのがきっかけです。

せっかくなので、赤岡まで歩いてみようと興味本位で歩いたんですが、道も分からず迷いながら、塩の道を外れながらも何とか赤岡にたどり着いたのを覚えています。その時は、一緒に歩いた仲間と乾杯をしたことでした。

「よし、この素晴らしい歴史と文化を持つ宝物を、再現して次の世代に継承することが、これから私たちのやるべきことだ」と、固い決意のもと取り組みを始めました。

平成17年にはこの活動が、香南市香我美町西川まで広がり、平成18年に赤岡町までの約30㎞の塩の道が整備できました。整備中には、馬の安全を祈る馬頭観音や休憩小屋の跡が見つかるなど発見もたくさんありました。

平成19年には、ガイドブックと馬のキャラクター「さくら丸」が誕生し、道案内役として活躍しています。この年は約400人が「塩の道」を歩いてくれました。最近では、自分たちで歩く方も増えてきました。皆さんが歩きに来てくれることが、喜びであり大きな力となります。

先祖らが汗を流して歩いた道を復活させ、実際に歩くことで歴史を振り返り、各地域の交流につなげていこうと整備を始めて10年が経ちました。まだまだやることは多いです。今後は、ガイド研修などで、後継者づくりに力を注ぎたいと思っています。

丁石（ちょういし）

丁石とは目的地までの距離を記した石で、そのほとんどは神社、お寺への距離が記されています。

塩の道では小高い山の上、他の道との交わりのあるところ、一休みするのに良い場所など、その土地でもっとも良いと思われるところに立てられています。文久、明治初期の建立が多く、地区の集落名や地元有志名が標記されており、大きいものでは2トン以上の丁石もあります。

物資の運搬だけでなく多くの人が参拝道としても使われていた証しで、まさに相互往来の往還道です。

▲庄谷相屋敷丁石
塩の道整備のきっかけとなった

祖父や父が通った塩の道を守りたい

土佐塩の道保存会
運営委員 **小松　滋**

香美市物部町の庄谷相の屋敷という所で生まれ育ちました。子どものころは戦前で、物心ついた時から、祖父や父が赤岡まで神祭や正月の買い出しのために塩の道を通っていました。往復約50㎞の道のりだったので、家を夜中に出ては、夕方に帰ってきていました。そんな苦労をして作ってくれたお寿司が脳裏に残っています。

山登りが好きだったので、若いころには、北海道から九州までたくさんの山を登っていましたけど、70歳を過ぎてどこか山を歩けるところがないかと思ったとき、あのお寿司がよみがえりました。

父や祖父が通った塩の道をなんとか元通りにして、友達と歩けるようにしたいと思っていました。そこでうちの田んぼに丁石が転がっていたので、これを元通りにしようと、当時庄谷相の区長だった公文寛伸さんに相談をしました。公文さんもやってみようと言ってくれて元通りに戻した丁石が、塩の道復活の始まりとなりました。

塩の道の復活は、一人の力ではできません。今は廃校となった私の母校、拓（つばせ）小学校の仲間や思いをひとつにする新しい会員も多く、塩の道の整備 草刈り、公園の手入れに汗を流しています。そんな仲間に感謝の気持ちでいっぱいで、自分もやれるまで精いっぱい頑張ろうと思っています。

今、塩の道では、ノリウツギやクサギの花が満開です。追い剥ぎ峠付近で見える奥物部の眺望もきれいです。四季折々の自然を楽しめる塩の道へ、皆さんもおいでいただけたらと思います。

◀塩の道のきっかけとなった丁石の隣には、小松さんが塩の道への想いを詠んだ句の石碑がそっと添えられている